
なんでやねん

山田一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでやねん

【Nコード】

N4944E

【作者名】

山田一

【あらすじ】

僕は思う。誰だって人生の主人公なんですよ。生きている限り毎日が舞台です。フィクションやファンタジーでは味わえない、一般人の普通のように普通じゃないノンフィクション人間ドラマ。子供の頃の人間形成を経て大人になって恋愛を経験するハートフルストーリー？

幼少期？（前書き）

読みやすく笑いやすい、そんな作品です。大人になるまでは前振りです。

まずは幼少時代から。

幼少期？

高度経済成長の最期、1973年の第二次ベビーブームって時代。いわゆる団塊二世。そんな中途半端な時代に生まれたんです。

貧乏盛りの学生結婚だった両親。男の子が出来て死ぬほど嬉しかった、と聞かされて育ったんですよ。子供の頃の記憶、それは小さな平屋建て長屋の狭い家で家族3人暮らし。っても記憶の中ではもう弟がいたけどね。だから4人。2歳以前の記憶なんて普通無いでしょ。

貧しくてもなんか気持ちは裕福。だって食えなかったことなんてないし、いつも家族一緒に食卓囲んでたし。ちよつと怖いオヤジと元気が取り柄みたいなオフクロ。ってか普通のどこにでもある家庭。ちよつと貧乏なだけ。でも幸せだった、それしか覚えてない。

両親共働きだからね。保育園に入園したんですよ。覚えてないけど。覚えてる事って言えば、絵を描いて賞を貰った事ぐらいかな。あと保育園の先生だったおねえさんが、僕の叔父さんのお嫁さんになった事ぐらい。すげー嬉しかった。だって先生がしょっちゅう家に遊びにくるんだもん。

僕が大人になってから先生が「ちよつと変わった子供だった」と思い出したように言うんです。他とは違う、特殊な何かがあったんだって。なんじゃそりゃ、覚えてないって。

全然覚えて無いことだらけの幼少期。でも、僕が高校に行く頃にオフクロと先生、ってかオバサンに僕の子供の頃の事をあらたまつて聞かされたんですよ。

あなたは変わった子供だった。保育園児なのに算数がスラスラできたし、大人の言葉がほぼ理解できた。頭の回転が異常に速く、家

族みんなで「神の子」や！って騒いだんよ。精神科医に連れて行って、知能検査もしたぐらいよ。それがこんな・・情けない・・。

なんでやねん、なぜ嘆く。僕は普通の子供だぜ？

少年期？（前書き）

当たり前のように小学生になりました。

少年期？

小学校に入学した。貧乏人の親や祖母達が精一杯頑張ってくれたんだろ。ピカピカのランドセルとなんか恥ずかしいぐらいのお召し物。不細工な顔に天然パーマ。なんか写真とか一杯撮られてさ、恥ずかしいったらありやしない。でも覚えてるのはそのくらい。30代半ばまで覚えてる事って少ないよね。

思い出せば習い事をたくさんさせられてた。貧乏人の子供なのに。体が弱かったので空手、頭が良さそうって勝手に決められて英語やそろばんやなんたらかんたら。どっかの金持ちのおぼっちゃんみたいじゃん。親たちは必死。こいつは大物になる、と自画自賛。すごいプレッシャーだね、僕。ちなみに知能指数は希に見る高水準だったらしい。何度も検査させられたもん。覚えてないけどね。

そんな気持ち知ってか知らずか。僕は普通に育つわけですよ。「やればできる」という自分を持ち、中途半端に生きていく。「やれば出来る」でもやらなきゃ出来ないんですよ。だからいつも成績は「ふつう」に「よくできる」がちよろちよろ。もちろん「がんばろう」も時々現れる。まあ実際だって良くもなく悪くもない。

延々書いてるけど、普通なんですよね結局。当たり前前の小学生、当たり前前の子供。石を投げれば誰かに当たる、そんな子供でした。でもね、この頃の事が今の僕の人格を形成したんでしょうね。

まあそれが例え小学生だったって、自分の事は理解してたつもりだった。際だって男前でもなく、才能あるスポーツマンでもない。もちろんモテモテのかつこいい男子じゃない。それぐらいのことはわかってた。平凡平凡。何が悪い？

でも友達はやたら多かった。いじめられっ子もいじめっ子も、暗

い奴も不良も。どつちつかずの八方美人と言われてても気にしない。人を好きになる事はあっても、嫌いになるって事はあんまりなかった。これは今でもそう。ただ、女の子は苦手だった。これも今でもそう。

女の子にやたら優しくかった。だって自分は「不細工で取り柄の無い男子」ってわかってたから。優しくするしか出来ないからね。格好つけることもできないし、もちろん「好き」って言われることも無かった。でも別に気にはしなかった。仕方ないことだもんね。

何も考えずただ毎日過ごしてた。だって子供だもん。子供の頃から夢に向かって一直線！って人いる？いたとすれば、それは自分で考えそして思っただけじゃなく、親の希望や夢ってのが影響してるよね。

僕の子供の頃の夢？世界征服。なんでやねん。

成長期？（前書き）

小学生高学年。初恋？しました。

成長期？

小学生も高学年となると、少し色気づいてくるんですね。髪型だったり、服装だったり。今までは母親が買ってきた服を文句も言わず着ていたんですけど、連れて行ってもらってスーパーマーケットで自分で選ぶようになったりしてね。鏡も見るようになったし。平成の子供達よりは少し遅いかもしれないけど、何か目覚めるんですよ。

もちろん悪いことも覚えた。盗んだり吸ったり飲んだり。でもそれも特別悪かったって事じゃない。誰もが通る道、そんな普通のうちに。

貧しかったとかそんな事じゃない。親は貧しくても何でも与えてくれた。ただ、周りに流されただけ。不満や葛藤もあつたかもしれない。でもそんなことじゃない。一通りの事を当たり前のようにしてしまっただけ。何もなかった子供の頃。ただ流されるだけの少年時代。

この頃初めて好きな女の子ができた。一緒のクラスの女の子。人気者で男子に好かれ女子に嫌われるタイプ。本当に好きだったかな？みんなが好きだから僕も好きになったのかな？ただその子とは普通に話せた。だって女子が苦手だったもん。小学生の頃の「好き」ってただ相手にその意志を伝えるだけのシンプルなものですね。「お前アイツのこと好きやろー」って。ただそれだけ。

そんな流れで交換日記とか始めた。好きだった女の子と。「なんで僕？」なんて思いながら毎日色んな事書いた。向こうも好きって言ってくれた。でもいつまでもコンプレックスが拭えない僕は信じてなかった。だって僕なんかダメダメ、普通の子供だもん。

ただ「お弁当が食べたい」って理由で課外活動も始めた。少年バスケトボール。仲の良かった友達に勧められて、ただ流されて始めただけ。楽しかったが、さして上手な訳でもなくただバスケトしていた、ってこと。ただ、その少年チームは強かった。だから僕もオマケで選抜に選ばれた。

なんでやねん。もっと上手い奴いっぱいいるやん。

小さな大人？（前書き）

中学時代前半ですね。

小さな大人？

中学に入ると自我に目覚めていく。と言っても不良になるわけじゃない。周りの友達や先輩は街に名前を轟かす不良達だったけど僕には関係ない。入学式、いきなり地元の先輩に呼び出され廊下をパンツ一丁で走った。虐められたわけじゃない。なにか凄いすがすがしい気分だった事を覚えてる。これがきっかけで自分の中で何かが弾けた。

流されるままバスケットに入り、そのまま目標もなくバスケットを始めた。最初の頃は「選抜」ってだけで体育館練習だったが、すぐに目が死んでる事を指摘されグラウンド組に放り出された。スポーツマンになりたかったわけじゃない。だって特に優れた運動神経って訳じゃなく、まあ空手も続けてたしね。どうでもよかった。ただバスケット部に入っただけ、そんな感じ。

当然のように成績は上がらない。親たちはこの頃から僕への期待を捨てたと思う。神の子と騒がれ知能指数が常軌を逸していた天才少年。その影は全く無し。普通のどこにでもいる落ちこぼれ寸前の子供。クラブを辞めなかった事が唯一の救い。

もちろん恋なんて僕には関係ない。小学生の時好きだった子は違う私立の中学に行ってしまった。もう恋なんてしないってのじゃない、恋とは関係ない世界に住んでいた。そんな感じ。好きな子も出来ず、勉強もクラブも楽しかった訳でもない。悪者の先輩達に連れ回され、楽しい世界を教えてもらっていた。でも悪者にさえなれなかった。

親はこの頃からバブルの恩恵を受ける。貧しさを経験してるこの世代の人間は本当に強い。我が家も平屋の長屋から三階建ての家に。

家に階段が付いたときの感動は今でも覚えてる。自分の部屋、自分のテレビ。そしてお小遣い。そんな忙しい中でも僕の親は必ず一緒にご飯を食べてくれた。幸せな家庭、家族。その中で中途半端な自分が凄く嫌だった。

目立ちたがり屋の中途半端な僕。1学年20クラスもあるマンモス中学なのに、3年間同じ先生が担任だった。新任の教師。入学式にパンツードで廊下を走った問題児を離せなかったんだと思う。そして3年生の頃、その先生に「生徒会を仕切れ」と言われた。

なんでやねん。僕が生徒会？天才メガネ君にやってもらえよ。

初恋？（前書き）

中学生後半かな。

初恋？

あまりにもマンモス中学だったので、僕が2年の時に分校ができた。そして新しい校舎に僕は移った。一番に落書きして、先生に思いつき殴られた。その熱い拳はいまでも覚えてる、って青春ドラマは無い。3年になって初めて好きな女の子ができた。小学生の時にも好きな子はいたが、そんなじゃない。胸が張り裂けるってのはこういことなんだ、ってのを覚えた。

ダラダラと続けていたクラブ活動。さすがに3年ともなると多少は本気。6人しかいない3年生。バスケは5人、補欠は僕1人。情けなかったね。仕方ないか、中途半端だったもん。でも好きな子がずっとそこにいたから休まなかった。彼女は女子バスケのキャプテン。だから僕は毎日クラブに行った。コンプレックスマンだったから気持ちは伝えなかったけど、見てるだけで幸せだった。これが初恋、自分で覚えてるリアルな恋。

「この学校は新設校だ。お前が一番に仕切ってやれ」と担任に言われた。まあどうでも良かったが立候補してやったんだよ、生徒会長。するともう1人立候補が。小学校からの仲間で学校一のモテ男だった奴。同じバスケ部のキャプテン。なんでやねん、邪魔すんだよ。仲間だろ？

僕は選挙を待たず身を引いた。勝てるわけない、そう思ったから。「やってみなきゃわからん！」と担任は怒ったが、中途半端な僕は身を引いた。こっちはお笑いキャラ、あっちはイケメン。惨敗は目に見えていた。友達は「選挙にならんからお前も立候補しろっていわれたぜ」みたいな事を言ってるが、その勝ち誇った顔が妙に腹が立つ。でも人を嫌いになれない僕は「じゃお前生徒会長やれよ」と言ってる笑いながら身を引いた。

先生は泣きながら僕を殴った。お前を男にしたかった、そう言っ
て殴った。なんでやねん、俺だって辛いんだよ、マジで。

俺？（前書き）

中学最盛期かな？

俺？

結局体育委員長つてのに落ち着いた。生徒会長はイケメン君。まあ仲は良かったんでそれはそれで楽しかったよ。だってクラブも生徒会も一緒だし。ってか生徒会自体がほとんどバスケットだし。なんでやねん。

初恋ちゃんとは3年になって同じクラスになった。もう大興奮。でも絶対バレちゃダメだって思ってた。バレたらその子が可愛そうやん。冷やかされたりしてさ。なんで気を遣うんやろ。甘いよね僕。好きな人に好きって伝えられない、それがつらかった。もつと男前に生まれてくれば・・・って思った事もあった。でもそれって間違いだよ。気づいたのは大人になってからだけど。中学ぐらいの時は他の原因なんて考えなかった。ただ好きだった。

とある友人からその子が学習塾に行ってるという情報を仕入れた。速攻で入学した。頭のレベルは遙かにその子が上。けどそんなの関係ねえ。好きなら成せる、間違いない。僕はすぐにその子のいるレベルの教室に入った。猛勉強したよなあ。恋すれば出来るもんだな。だって一緒の高校行きたかったから。「絶対女子校いくなよ！」がその頃の口癖。その子に「なんで？」って言われても・・・なんて答えてたんだろ。思い出せないよ。

学習塾行くために習い事は全部やめてた。唯一続けてたのが空手。空手の先生怖かったから・・・辞めれなかった。ただ何となく続けた。そんな感じ。でもね、僕にもチャンスが来たんですよ。地元の都道府県の大会で優勝してしまっただですよ。こりや大変だ。平成の世の中では「空手」ってのは格好いいよね。格闘技ブームだし。でもその頃はそうでも無かったんですよ。汗臭いし、なんか違うよね。スラムダンクブームだもん。格闘技なんてダサイよね。だから

学校の友達には言えなかった。空手で全国大会。今思えば言つとけば良かったな。

そして全国大会へ。場所は日本武道館！キャンデーズだぜ？光ゲンジだぜ？中途半端な僕が輝くチャンス！地元からたくさん応援団が来てさ、横断幕とかあるわけよ。親は「やつと芽が出た。やっぱりこの子は神の子よ！」と大喜び。

なんでやねん。期待してたのは頭脳じゃねーの？

早春？（前書き）

中学生ラストかな？

早春？

全日本空手道全国大会。格好いいよね。僕も都道府県代表ですよ。道着には地元の名前が刺繍してある。負ける事なんて考えて無かった。親たちは騒ぎ先生は気合い入りまくり。僕も精一杯の気合いで戦いの場へ。ってあら、相手ほんとに中学生？ローランドゴリラじゃん。強烈な目付きで睨んでるよ。超ヤンキーじゃん。なんかデケエシ。中学生でも体重別にくれよ、殺されちゃうよ、マジで。ヤクザゴリラ対中途半端な僕。結果はわかるよね。

東京から帰ってさ、学校に行くともうその噂が教室に広がってるのね。「あいつ空手で全国一回戦負けだつてさ。ダセー」とか言われてさ。落ち込むつてば、やめてくれよ。空手の先生や親たちにもがっかりさせたのに。身長160台で極道ゴリラに勝てるわけねえよ。お前ら何もわかってないくせに。

泣きたかったけど、泣けないんですよ。キャラじゃないし。「いやー、全国は広いわ」なんて言つてさ。ヘラヘラ笑うのが精一杯。本当は一番悔しいんは僕だぜ？つか僕が空手やってたなんてお前ら知らなかったろ。誰にも言わなかったんだから。担任教師が「あいつは今、全国大会で戦つてる」なんて言いふらしやがったからバシたんじゃねえか。俺は職員室行つて先生にしがみつき、思いつきり泣いたよ。悔しくてどうしたらいいかわからんくつて。先生に殴られた。「負けて知るものつてあるんじゃないか？」つてね。その時はわかんなかったけど、今じゃわかるよ、先生。

夕方、バスケット部の活動に出るのがイヤで校舎の影で1人で座つた。なんもやる気がしなくつて。親もがっかりさせたから家にも帰りたくない。しばらく親と話するのイヤだったし。んならね、僕の

大好きな子がそこに来たんですよ。なぜかわからないけど。校舎の影に。

「すごいよねー。全国？じゃ地元で一番やん？」

って話しかけてきた。「え・・・？まあそうだけど」みたいな会話。でも僕はたまらなかった。嬉しさと恥ずかしさ。なんかそこに座ってウジウジしてる自分がまた嫌いになった。もちろん今まで会話をしたことがあるけど、二人つきりつてのは無かった気がする。ヤバイよ、これ。

なんか色々話し込んだ。たわいもない会話だったような気がするけどね。覚えてないわ。覚えてるのは、バスケット部の仲間がその子に僕を元気づけてくれて頼んだこと。そしてそれを快く了承してくれたその子。そんなことは後から知るのだが、その時はすごく輝いて見たね。マジ天使。絶対僕をバカにしない、素晴らしい女性。泣きそうになったけど、頑張って耐えたよ、僕。

ってかなんでやねん、みんな知ってるの？僕がその子好きだって事。

おお？（前書き）

やっと高校入りました。

おお？

中学の卒業式。がんばった甲斐があったもんね。大好きな子と同じ高校！地元の公立高校に合格したんですよ。バスケット部のみんなはバスケットの強豪校へ行ってしまったけど、僕にとってはバスケットなんてどうでもよかった。その子と同じ高校へ行きたかったから。高校行ったら告白する！不細工だけど、男前じゃないけど言ってみなきゃわからないもんね。

高校へ行き、クラス発表。知らない奴ばかり。当然のごとく好きな子とは違うクラス。なんか僕、勉強しすぎて頭のいいクラスに入られてしまったんですよ。おいちよつと待てよ、そんななんいらんからあの子と同じクラスにしてくれよ。クソツタレ！

高校入ってもまたバスケット部。だってあの子が「男子バスケット部のマネージャーする」って言うから。同じ中学は僕だけ！やったぜ！僕の高校生活はバラ色じゃん。ってかずつと同じ子を好きな僕ってオカシイかな。なんて思ったりしてね。

高校入ると、意外と女子から話しかけてもらう機会が増えた。目立つキャラだもんね。生まれて初めて「付き合って」って言われたよ。でも僕には「付き合う」の意味がわからない。だって女の子に興味が無いから。ただ1人を除いて。「付き合って何？どうしたらいいの？」って真剣に答えたのを覚えてる。

んで女の子にコンプレックスがある僕は、付き合ってと言われて断る術を知らない。だって断ったらかわいそうじゃん。僕なんて「好き」さえ言えない情けない男。付き合って、というには凄い勇気がいることだと思ってたし。「え、僕でいいの？」ってな感じ。「で、どうする？」ってな具合。バカですよね。

同じクラスの友人。今でも親友。こいつは入学してから「お前の好きなのはあの子か？」ってずっと応援してくれてた友人。イイ奴だ。僕はクラブ活動以外はずっとそいつと一緒にいた。いつも「お前、好きでもない女から告られたら断れよ！なんであんなブサイクやねん！」って言われて怒られてた。「断ったら悪いやん」と言うのと「じゃあフラれんなよ、あんなブスに！」ってまた怒る。僕は適当に断れないから、いつも女の子の方がすぐに飽きて向こうから「別れて」って言うてくるんですよ。んで「はあ、わかった」って感じ。

なんでやねん、付き合っって何？

おお？（後書き）

まだまだ続きます。

マジ？（前書き）

初告白です。

マジ？

いろんな女子とふれあう事によって自分が磨かれていくのってこの頃なんですよ。今の高校生の子供達はマセてるとか性が乱れてるとか言うけれど、それはそれで良いんじゃないですかね。色んなモノを失いそして得る事は大事ですからね。ただ、僕たちの頃はもつと性というものに対しては大人しかったように思う。僕だけ？

高校一年の時、また空手の大会で優勝したんです。二年連続都道府県代表！僕すげー。すぐにマネージャーに報告。マネージャーってのはもちろんあの子です。

「俺今年も東京いくんだ。い、い、い、一緒に応援しに来てくれな
い？」

これが生まれて初めての告白。ダサイ。格好悪い。当然「学校あるから・・・」って断られた。そりやそうだよ。誰がいきなりそんなこと言っについてくる？バカか僕は。でも一歩踏み出した。あの中学の時の校舎の影。この子だけが知ってる、僕の悩み。ただそれを言いたかっただけかも知れない。

「頑張つてね。応援してるよ！」最高、この言葉だけで空飛べる。すでに日本一になった気分。「去年の悔しさ、返してきてね」だつてさ。今いるか？こんな子。いねえだろ。この子を好きで良かった。人を好きになるっていいよね。なんか色んな女子と知り合ったけど、他の子はただの人間。女は顔じゃない、心ですよ。まあこの子は顔も抜群なんですけどね。

「バスケ部には休むって言つといて」と言い、僕は再び全国の舞台へ。今度は代々木体育館。去年のかりを返すべく、弱く情けなかった自分に別れを告げるべく僕はその舞台に立った。中学の先生に

電話をし「先生、俺取り戻しにいくわ」と告げる。応援団は半減、親さえこねえ。気が楽だよその方が。もうここであの弱かった自分にサヨナラだ。んで試合が始まった時、僕は相手を殺し屋の目付きで睨み付け、心の中で呟いた。

なんでやねん、なんで黒人やねん。んなアホな。

マジ？（後書き）

まだまだ続きます

あーあ？（前書き）

高校二年かな。

忘れられない一瞬。

あーあ？

まあ二年連続一回戦負けなんですけどね。つーか大会役員、わざとだろ。だいたい空手の全国に来る奴つてのはゴツイ野郎ばかり。僕みたいなスマートな奴なんているわきゃないし。格好悪いよ僕。もう穴があつたら入りたい、ってか過去の自分を埋め殺したい。

結局その後空手を辞め、バスケ部一本に。強豪中学出身は僕だけだったから結構優遇されてさ。だって中学の仲間はみんな有名校にいつちまつたし。でもね、すぐにバレるんですよ。目が死んでる事何やつても中途半端。終わってるよね僕。中学の時みたいな熱い教師もいないし、ただ情性で学校行つて出席取つて。ただあの子に会えるからクラブ行つてた。そんな感じ。情けないつたらこの上ないこの頃になるとみんな夢とか目標持ち出すよね。僕には無かった。本当に情性で生きてた。

二年になると、僕の親友君が僕の好きな子と同じクラスになったんですよ。僕は違うクラスだったけどね。「俺に任せろ。必ずお前らを引つ付けてやるから」大きなお世話だよバカ。こっちは何年も片思いなんだよ。自分で頑張るから放つておいてくれって。でもね、その友達の言葉は今でも覚えてる。期待はしてなかったけど嬉しかった。「モテない」と思いこんでるマイナス思考の僕にとって、頼もしい友人ですよ。

色んな女の子と友達になり、どんどん意識し自分が磨かれていく。この頃が一番そういう時期かもしれないよね。相変わらず女の子が苦手で優しく接することしか出来ない僕。幼い頃からのコンプレックスは30代になった今でも続いている。当然この頃もそう。「お前あんなバイキンと喋んじゃねえよ」とか言われても気にしない。だ

からそういう虐められてたり目立たない女の子から人気あつたかも。全然気にもしてなつかたけど。だって好きな人いるしね。

で、二年になって、その僕の友人君が僕の好きな子とすぐに付き合
ったって聞かされた。

なんでやねん。なんでやねん。

あーあ？（後書き）

続くぞー

マジですか？（前書き）

さて、お付き合いする人が出来ました。

マジですか？

僕の恋は終わりました。思い続けて数年。友人がその子と付き合い
つたって事より、何も出来なかった自分に無性に腹が立つ。友達と
はその後喋らなくなりました。もちろんその子とも。別にお互い避
けてる訳じゃない。もちろん「おめでとう！」って気持ちもある。
だって大事な友達が、僕の知ってる一番素敵な女の子と付き合い
たんですよ？良いことじゃないですか。

結局「好き」って気持ちだけじゃダメなんです。その好きって気
持ちを力にして自分を磨き、そしてその好きって気持ちを全部伝え
る。それでフラれたって「やるべき事はやった」って思えるんじや
ないかな。なにもせずただ見てるだけ。それで「何かを失った」な
んて思ってる自分が死ぬほどイヤだった。好きな子を取られた？こ
とよりもそれが辛かった。

結局自分はそうだったんですよ。子供の頃から中途半端。何もせず
ただ平凡に過ごす。親に甘え、夢も持たずただ日々楽に生きること
だけを知らず知らずのうちに選んだ。これは今の自分にも言える
こと。この高校生の頃にその性格が治せてたら……。なんて今でも
思う。でもその頃は治せなかった。未熟だったし、スネる事しかで
きなかった。たかが失恋。だれでも一度は経験すること。失恋を経
験したことがないって人は勿体ないよね。だって凄い成長するん
ですよ、自分が。その気になれば、の話だけだね。

僕もその後同じクラスの女の子と付き合い合った。もちろん好きだか
ら。この時は自分から告白した。「あの子」が無理になったからと
かじゃない。そんなこと思いたくもない。でも周りからみたらそう
見えたんじゃないかな。格好悪い、僕。でもあの事があったから、

多少は変わったかもしれない。だって積極的な自分がいるんですよ？僕は精一杯お付き合いした。だって優しくすることしか出来ないから。僕の告白を受け入れてくれるなんて。そんな女性を泣かすなんて考えられない。だから精一杯がんばった。

なんでやん。なんで僕はこうなんだ。

マジですか？（後書き）

続けます。

恋愛小説？（前書き）

なんか恋愛語ってます。

恋愛小説？

恋愛の形ってそれぞれ。全ての恋愛がドラマだし、例えそれが一夜だけの恋だったりしてもそれはそれで恋愛の形。テレビドラマでは語れない、それぞれの人の恋。100人いれば100通り、いやそれ以上の恋の形がある。だから恋は面白い。辛いのも楽しいのも恋。だから恋って面白い。こんな中途半端な僕でもたくさんの恋を経験したつもり。

高校二年の時に付き合った彼女。彼女自身も長続きするなんて思ってもいなかっただろうし僕も思っていなかった。ただ楽しかった事は今でも覚えてる。その子の言うことは何でも聞いた。家の方向全然違うのに毎日一緒に帰った。当時僕は「オートバイレーサーで世界征服」とか言いながらバイク乗ってたんですよ。いわゆる高校生サーキットレーサー。でも彼女が「危ないから辞めて」と言っただけでスッパリ辞めちゃいました。結構期待されてたんですけどね。ってそれくらい彼女にのめり込みました。なぜかわからないけど。

だってまともに女の子とお付き合いするなんて、昔の僕じゃ考えられなかった。中途半端で格好悪い、女の子と一緒に歩くだけでその子に悪いと思ってたぐらいのコンプレックスの固まり、コンプレックスマシーン。そんな一途で頑張る僕に彼女は誠意を感じてくれたのかな。お互いにいいお付き合いが出来た。「別れる」なんてことなんて考えた事もなかった。

当たり前ですよ。誰だって「別れ」を考えながら恋愛なんてしないはず。考えてるとすれば、それは精一杯できてない証拠。自分がどう思われてるかどうかなんていいんですよ。まずはこっちが全てをさらけ出せばおのずと伝わる。

恋は奪うもの、愛は与え続けるもの。

相手の気持ちをしっかりと奪うんです。自分の気持ちをしっかりと伝えて。それで奪えないなら、それは恋にも到達していない。ただのお気に入りですよ。そして相手の気持ちを奪えたら自分の全てを与え続ける。少しずつでもいい、与え続けてこそ愛。これをすべてひっくるめて恋愛。そうなんですよね。この頃そういう事がわかってたら・・・。

なんでやねん。もう遅いよ。

恋愛小説？（後書き）

続きます。

大人？（前書き）

そろそろ大人になってきました。

大人？

高校を卒業して、僕は違う街に学生として行った。高校二年から付き合ってた彼女とはまだ続いている。「卒業したら別れるって思ってた」なんて言ってるが、僕には意味がわからない。だって僕は女性に対して「嫌いになる」とかそういう感情が無い人間。自分のことを好きでいてくれたらそれでいい。自分から嫌いになるなんて絶対ない。子供の頃からそれだけは変わってない。

僕も男。この頃になれば他の女性に目移ることも多少はあった。でもね、恋人ってのはまた別。だって一緒にいるのがあたりまえじゃん。ケンカしたら仲直りすればいい。嫌なことがあったら注意すればいい。それだけのこと。そんなこともできないなら、最初から付き合わない方がいい。僕はそういう感覚。だから18歳にしてこの子との未来を考えてた。それは恋愛うつつじやなく、当たり前のこととして。何よりも大事、何よりも素敵。そんな感じで僕は生きてた。

厳しい家の育ちだった彼女。僕が違う街にいた2年間で泊まりに来たことは1度だけ。やばいよね、純愛ですよ。僕は彼女に「お泊まりだよ。何がしたい？」と尋ねた。すると彼女は「深夜のコンビニに二人で行きたい」だってさ。そんなちっぽけな願い。すぐ叶う願い。でもね、その些細な瞬間を喜べる二人だったんですよ。

恋愛ってのは得てしてマンネリになるもの。誰だってなるよ。同じ人とずっと一緒だもん。当たり前じゃないですか。でもね、そのマンネリを楽しまなくっちゃ。だって相手がいないけりゃマンネリもクソもないんですよ？僕は幸せでした。こんな素直な子が僕みたいなどうしようもない男を好きでいてくれるんですから。でもね、

僕は心のどこかでいつも感じてたことがあるんですよ。「なぜ僕はこんな人間なんだ」って。

人を好きになることもできた。人に好きって言って貰えるようになった。でもね。まだ僕は中途半端なんですよ。子供の頃からずっと離れない、僕のコンプレックス。中途半端な僕。何に満たされ何に幸せを感じ、何をすればいいのかわからない。それが恋愛であっても。ただ目の前の人を「好き」と思おうとしてただけなのかもしれない。

なんでやねん、コイツが最高の女じゃん。

大人？（後書き）

続けていいですか？

結婚？（前書き）

さて、そろそろ本編ですかね。

結婚？

だらだらと25歳になった。高校の時から彼女とはまだ続いている。ケンカは絶えなかったけど。でも彼女がいるから僕がいる、って思いに変わりはない。でも他の女性が嫌いなわけじゃない。っていうか浮気ってのはそれなりにした。昔から女性が苦手で、自分を「不細工」という言葉で片付けてきた自分。だから近づいてくる女性は誰も逃したくなかった。だってこんな僕の事好きって言ってくれるんですよ？

いつしか汚い駆け引きも覚えた。騙すつもりなんてない。だっていつも一番に言うもん。「彼女がいます」って。それでも遊んだ。自分を待ってる人の事など考えず。幼き頃、女性を苦手としていた反発かな。もうそこら中で遊びまくった。自分はモテる、なんて勘違いもしたこともあるぐらい。女の子に「優しいね」と言われるたびに胸が痛んだ。だって僕にはそれしかないから。それだけしかないんだから。かっこいいねと言われたことは一度もない。それは今でもかわらない。

そして。そんなバカな自分がまたイヤになった。何も成長していない。子供の頃から何も変わってない。夢も持たずただ遊ぶ金ほしさに働き、そして彼女との時間をつくる。隙間を狙っては他の女性と遊ぶ。女性と遊ぶ事によって昔の自分を捨てようと思ってたのかもしれない。何も変わらないのにね、そんなことしたって。

そんな自分と決別するため、結婚することにした。

結婚して家族を持ち、責任を負いそしてやっと過去の自分にお別れしようとしたのかもしれない。ずるいよね。恋愛と自分のコンプレ

ツクス解消をごちゃ混ぜにしてる。もちろん相手の気持ちも考えたが、結局自分の事ばかり考えてた。結婚すれば自分が変わり、過去のコンプレックスを捨てられそして新しくなれると思ってたのかもしれないね。

なんでやねん、相手の気持ち考えろよ。

結婚？（後書き）

次からが僕の本編です。たぶん。

また恋愛？（前書き）

さて、これからが本番です。

また恋愛？

25歳の春、彼女に言った。「結婚しようか」って。彼女泣いて喜んでくれた。17の時から付き合ってたのもう8年。さすがにそろそろだよな。少し訳ありで裕福ではなく、怖い父がいつも目を光らせていた彼女の家。だから彼女は家を出ることを喜び、そして僕と一緒にすることを望んでくれた。いつも中途半端な僕の心。でもこれで僕も一人前になれるかもって思ってた。家族を持つことの責任感つてのを感じたかった。でも結局自分の事ばかり考えてたのかもしれない。コンプレックスを抜け出すってことに。

そして話は順調に進んでいく。両親への紹介挨拶も済まし式場も決めた。新居も探している。結納や指輪、様々な新しい環境が周りを囲み出した。自分から結婚しようって言い出したくせに、あまりの周りの変化に戸惑ってしまう。そんな中途半端な僕について試練の時がきたんですね。

友人の姉が、「ご飯行こう」って誘ってきたんですよ。なんかコンパがドタキャンになったらしく、後輩の女の子と3人いるから来い、とのこと。ハア？って感じだけど、これまた女性からの誘いが断れない僕はノコノコ出て行っただけですね。何もない居酒屋。女性3人と僕1人。なんか嬉しいような緊張するような。

そこに行くと友達の姉がいて、ニコニコしながら他の子を紹介してくれた。1人はツンケンしてる愛想の無い子。もう1人はニコニコして愛想の良い子。僕は「こんばんわ」と当たり障り無く会話。だって苦手だし、こういうの。コンパとかなら騒げるし、どっちかと言うと盛り上げ役だからね。でもさすがに3対1はつらいよ。

しばらく話してた。僕がもうすぐ結婚することやくだらない世間話など。軽快なトークとほどよい緊張感。なんか楽しかった。その時のことははっきり覚えてる。でもね、その途中で気づいたんですよ。ツンケンした愛想のない子。その子が僕が中学から好きだった子に似てるって事にね。ほとんど喋ってくれないけど、顔や雰囲気は似てる。ってかタイプ。うわー、ヤバイ。カワイイよね。

ツンケンしながらもだんだん打ち解けてくれる。僕の無駄に低姿勢な姿も好印象だったのかもしれない。低姿勢？女性が苦手なだけだぜ。くそー、僕っていつまでたってもダメだなあ。ってか結婚前に他の子気に入っちゃだめじゃん。ダメダメ、そう言うところが僕のダメな所なんですよ。でもそんな少しの時間でも何か感情が沸いてきた。

なんでやねん、俺ももうすぐ結婚するんやで。

また恋愛？（後書き）

続きます。僕が死ぬまで。

ドラマ？（前書き）

さて、相変わらず中途半端です。

ドラマ？

彼女と結婚の事を進めながらも、僕はその子に夢中になった。こんなタイプは初めて見た、って感じの女の子。綺麗な顔立ちしてて、凄いい男性からモテてるらしい。だから初めて会った僕なんかと喋る気にはならなかったんでしょね。でも僕は「うひょ、いい女！」なんてがつついたりしなかった。だって僕なんかがこんないい女性と釣り合うなんて思わなかったし。初めて会った時は連絡先なんて交換しなかった。そんなこと出来るわけないし。

でも日が経つことに思いがつのる。ヤバイね、恋してるよ。

もうすぐ結婚。年が明けたら挙式。僕のこんな中途半端な気持ちを、知るわけもない婚約者。毎日楽しそうに色んな事決めたりしてる。でも僕の中にはあの子がどつかにいる。うわー、ダメダメじゃん。男失格だよ。婚約者がいながらそんなこと考えたりしてたらさ。最低じゃん。

とある日。友達から電話がなり「今コンパしてるからお前も来い。絶対来い！」と呼び出されたんです。誘われたら断れない僕はまたノコノコとその場所へ。そこで驚いたのは、気になるあの子がそこにいた事です。「びつくりしたやろー」って。おいおいどういこととやねん。僕の友達が色々コンパの打ち合わせをしているうちに、共通の知人として僕が浮上。んで呼び出されたって事。女の子は後から僕が来るのを知っていたそうです。

凄いい舞い上がった。もう飛び上がった。コンパっていう特殊な盛り上がりの中、やっと連絡先を聞くことが出来た。聞いてどうするん？結婚するんでしょ？また中途半端な僕。ダメダメです、いつまで

たつても。そして急にその女の子が僕にプレゼントをくれた。なん
で？なんで？初めて会った時、僕の誕生日の前日だったんですね。
んで「今度会うことがあれば誕生日プレゼントくれよー」なんてふ
ざけて言ってたのを覚えていてくれてたそう。

なんでやねん。もうたまんねーよ。

ドラマ？（後書き）

続きます。

転機？（前書き）

ダメな男です。

転機？

しばらくして僕はその子を誘った。誕生日プレゼントのお礼にご飯でもごちそうしますって。すると快くOKの返事。やべーよ、嬉しすぎる。婚約者がいるのにこの気持ち。あーダメダメ。そして待ち合わせ場所へ行くとそこにはもうあの子が。「今日仕事辞めたの」っておい、そんな日に僕と食事していいの？「こんなものあるんだけど・・・」とその子が差し出したのは、怖いことで有名なお化け屋敷のチケット。僕は「よし！メシ喰う前に行こう！」と車を走らせた。

山道をグングンはしる。外は大雨。普通に怖い。そして閉店間際のさびれた遊園地。そこでお化け屋敷に入る。ツンケンしたいつものイメージとは違い、叫びまくる彼女。僕の手をしっかりと握り怯えている。落ちた、僕は完全に落ちた。結婚するのに、今更人を好きになってどうするねん。バカですね、全く。

それから何度となくデートした。もちろん婚約者とも会ってる。どっちつかず、ダメな僕。その子も「この人はもうすぐ結婚するんだから」という思いから軽い気持ちで遊び始めたのかも知れない。それがね、だんだんと彼女の方も僕が気になってきたんでしょよね。誘われる回数も増えていき、誘う回数も増えてきた。二股じゃん、僕。

人ってね、無理な状況や先のない状況で恋すると暴走するんだって。

だから不倫とかは燃えるんですね。「私はダメなことしてる」「

僕は何をしてるんだ」そう思ってしまう恋がいちばん熱くなるんですよ。誰だってそうでしょ？いけないことしてる、って気持ちが導火線になる。婚約者がいて、僕は結婚する。その日が終わりの日。2人ともわかってたし凄く燃えた。毎日楽しかった。僕の心は完全にそっちに向いてしまってた。年があげたら、2人で温泉に行こうとも決めた。それが最後に会う日ってのは2人ともわかってた。

とはいえもうすぐ結婚。長い付き合いの婚約者もおそろかにできない。段取りも忙しくなってくる。結婚式まであと二ヶ月。もし僕が本当に天才ならドラえもん作るのに。時間を戻すのに。そんな事ばかり考えてた。長い付き合いの婚約者、そして僕にはもったいないぐらいの女の子。おい神様、何の試練だよコレ。でも僕は親や婚約者の事を考えると裏切るなんて考えられなかった。

そして大晦日。「最後の大晦日だから親と過ごす」と婚約者。バカな僕はあの子を誘った。だってもうすぐ会えなくなるんですから。その子も快くOKしてくれた。手を繋いでさ、初詣。本当に楽しかったけど、除夜の鐘ききながら何か知らないけど涙が出てきた。自分のいい加減さ、そしてもうすぐこの子に会えなくなる寂しさ。そして家で待っている婚約者。

子供の頃からいい加減で中途半端な僕。結婚しよう決めてもこの有様。女性が苦手で、遊びで捨てるなんて考えられない。女の子にはまっすぐ向き合ってきた。昔からそうなんです、別れてできないんです。僕のことを好きでいてくれるこの子と別れるなんて考えられなかった。でもね、もうすぐ離れるんですよ。タイムリミットが来たら。

そんな大晦日の夜、僕は倒れた。なんでやねん。

転機？（後書き）

続きあるんですが・・・。

別れ？（前書き）

長いね、この話。

別れ？

大晦日、つか元旦に緊急入院。持病であつた椎間板ヘルニア。くだらない恋の悩みで疲れ切つていた体と心。そしてインフルエンザ。無理して夜中に初詣なんか行つたからかな。彼女を「なんか体の具合が悪い」と早めに送り届け、自宅に帰つたらそのまま倒れた。正月の朝一から救急車。だつて歩けなかつたんだもん。腰が痛くて車いすにさえ座れない。インフルエンザで声も出ない。熱は40度近く出ている。そして知らないうちに悩んで激減していた体重。バカですよね、僕。

病院に着くとすぐに処置。元旦ですよ？元旦。バカでかい注射を何本も打たれ強制的に熱を下げられる。動かなくなつた腰には神経ブロック注射を打たれ、そして機械で引つ張られる。痛すぎて涙もでない。声も出ないし。「一週間は大人しくしてもらいます」だつてさ。つておい！僕は4日から温泉旅行なんだよ。マジかよ、絶望的じゃん。あーあ。二股なんてしてるからこんな目にあうんだ。自分が悪いんだ。

僕は2人にメールした。婚約者とあの子に。

婚約者が来た。怒りながら「こんな大事な時期に何してるん？早く治してよ！」と怒られた。おいおい、病気だつつの。婚約者は「これでも読んで勉強しなさい」とゼクシイを置いていった。なんでやねん……。優しくしてくれよ。声がでない僕はただうなずくだけだつた。

そしてその後、あの子が来た。泣きながら「私と無理して昨日遊んだから・・・」と泣いている。たくさんの雑誌を抱え、「どんな本が

好きかわからないから・・・」だってさ。温泉なんてキャンセルしたらいいから早く元気になってね、だってさ。声が出ない僕は何も言えず、ここで初めて泣いた。痛いとかじゃなく、人の優しさに触れて泣いた。

中学生の時。校舎の影で僕を元気づけてくれた女の子。初めての恋だったけどはつきりと覚えてる。その時と同じ気持ちに僕に沸いてきた。

動けない僕、声が出ない僕。ただ泣くしか出来なかった。彼女は「私が長居したら迷惑かかるから、行くね」と行って出て行った。歩くことすら出来ない、声もでない僕。ただ見送る事しか出来なかった。

僕はその時決めた。婚約者に別れを告げようと。誰もいない病室でずっと泣いた。

なんでやねん、僕なんでやねん。

別れ？（後書き）

まだまだこれから。

ウソ？（前書き）

うーん。

ウソ？

僕は一週間入院を告げられていたが、翌日の2日の日に病院を逃亡した。つても勝手に退院したんやけどね。「もう治った。俺すげー」なんて医者に言ってるね。だって温泉行かなきゃだめだもんね。熱が下がったのと神経注射が効いたのか、どうにか歩けるようになってた。この時は本気で奇跡だと思ったよ。だって歩けなかったんですよ？歩けなかった、じゃなくて歩けなかった。腰が激しく痛み、動くことすら出来なかった。

でも翌日に不思議と歩けるようになってた。体がどうこうじゃなく、旅行の事ばかり考えてた。すぐに彼女にメールし、「旅行は行くぞ」と告げた。声はまだ出なかったけど。家に帰ると親に凄く怒鳴られた。だってそうですよ？一週間入院って言われてるのに勝手に退院し、んですぐ旅行に行くだって。そりゃ怒るでしょ。でも僕は振り切って旅行に向かった。

声は相変わらず出なかった。車の中で筆談しながら会話。二日前まで動けなかった奴が運転して旅行ですよ？考えられないってか凄いやね。「俺、どれだけこの子が好きなんやろ」そんなことばかり考えてた。旅行中、彼女は声のでない僕の変わりをずっとしてくれた。まあ当たり前だけどね。恋にボケてたらそんなことも嬉しいんだよね。

たった一泊だけど、楽しかった。普通に歩けるようになってたし、熱も下がってた。一緒に露天風呂入ったり、夜中まで飲んだり。ホントは「婚約者と別れる」って考えを言おうと思ってたけど、それはその子の気持ちを考えてやめておいた。だってそうでしょ？いきなり別れるから付き合ってくれ、って言われたら誰だって戸惑うと

思っんです。だから彼女はこの旅行中、「もうこれで最後かもね」
って思ってたと思う。

よく我慢したよ、僕。「今すぐでもこの子と」なんて気持ちを伝え
たっかた。でもね、やり残したことあるから言えなかった。婚約者
のこと。まあ普通そうですよ、先に片付けなきゃいけないことあ
るからね。高校からずっと一緒だった婚約者。僕が一番の理解者で
あり、恋人だった。中途半端な性格で、いつも逃げてばかりだっ
た僕にできるのかな。別れて。

なんでやねん、本当にいいの？

ウソ？（後書き）

続きもヨロシク

ついで(前書き)

あらは。

ついに

そしてしばらく悩み続けた。今思い出そうとしても中々思い出せないが、もう淒く苦しんだ。親の顔が見れなかった。もちろん婚約者の顔も。ダラダラと何も出来ず時間だけが流れていく。男のくせにメソメソして、そして痩せていく。そして結婚式まで1ヶ月を切った。あのとき病室で本気で決めた決断。僕は結婚をやめる。それがまた揺らいでた。ほんとダメな奴。いつもそう、後悔ばかり。

でもこの時初めて僕は男になった。婚約者を呼び出し「結婚できない」と告げた。呆然とする婚約者。「何ゆってんの？」ってな感じ。そらそうでしょ。でも僕は言い訳とかしなかった。本当の事を告げた。

「好きな人がいる」

崩れ落ちる婚約者。それを見る僕。人生で一番辛い瞬間だったかもしれない。

女性にコンプレックスを持ち、中途半端で女性に意見したりするところがなかった僕。生まれて初めて恋愛という感情の中で、自分を主張した。もうどうしようもないくらい泣き叫ぶ婚約者。僕はまた自分を責めだした。でも、でも初めて自分に素直になろうとしたんだ。別れであろうと付き合いであるうと、自分の心の意見を口にする事ができたんだ。ここは自分を信じて乗り越えなきゃ。そう思った。

そして僕はそのまま婚約者の親の所へ行き、全てを告げた。当然相手の親にも泣かれた。自分のわがままでこれだけ周りが悲しんだのは初めてかもしれない。でもここで止まっちゃだめなんです。自分変わるんだ。そして中途半端な気持ちで別れを告げるなんて失礼じゃないか。その日のうちに式場や貸衣装屋、神社全てにキャンセル

ルを入れた。もう止まっちゃだめなんだ。止まらないんだ。

僕が別れたからって、あの子と一緒にになれるなんて保証はない。だって言ってなかったもん、こうするって。温泉から帰ってから連絡を取ってなかったし。あの子はもう僕から離れ、誰かと新しい恋してるかもしれない。そんな不安もあったけど、僕はまず婚約者に真実を告げる事を選んだ。間違いだらけで狂った選択をしてるのはわかってる。婚約者を捨てて浮気相手の所に行くんだからね。

僕は最後に婚約者に「ありがとう」とだけ告げ、高校時代からの思い出を全て捨てた。

自分の親に全て話した。泣き叫び殴られた。僕はすごい苦しかったよ。でもこれ乗り越えなけりゃ、本当に好きな物が入らないんだ。初めておこした自分からの行動。責任は重かったが、中途半端な僕が少しだけ成長できたかもしれない。そんな気持ちが僕を支えた。そして数日後、僕はあの子に電話した。「俺、結婚辞めた。付き合ってほしい」ってね。彼女、驚いて声も出なかった。恐らく自分を責めていたんだろう。「私のせいで・・・」なんて思ってたのかもしれない。そして彼女の答えは保留のまま、翌日会う約束をした。

しかしその日の内に、僕はまた倒れた。なんでやねん。

ついに（後書き）

続きもあります

入院？（前書き）

長すぎます？

入院？

今度は長期入院決定。だって歩けなかったし。「一生歩けないままかもよ」なんて言われてさ。えー！人生の転機なのに。自分で行動して、そしてやっと決断できたのに。僕はあの子に会う事もなく、遠い街の病院に入院した。だって地元の病院じゃだめなんだ。遠くへ行つて考える時間が欲しかった。急に会えなくなったあの子には連絡した。「また入院！最悪！」ってな感じ。答えはまだ貰ってなかった。

親も毎日来れるような場所ではなかった。だから毎日一人。一応入院すると痛みも治まりなんとか歩けるようにはなった。でも手術は決まっていたんです。だっていつまでもこんなんじゃダメだからね。高校卒業後に始めたサッカーも楽しくなってきた頃だったし。もう一度歩けるようになって、サッカーしたかったし。それよりなにより、あの子と歩きたかったし。もう一度サッカーできる、って保証は無かった。どこるか歩けなくなる可能性つてのもあった。

そんな時、病院にあの子がやって来た。僕らの街から電車で一時間わざわざ来てくれた。

彼女は「手術が終わって退院したらどっかデート連れてつてね」って言うてくれた。僕は泣いた。それが答えじゃん。歩けなくなるかもしれない僕に答えと頑張る気持ちをくれた。それから毎日のように来てくれた。僕もどんどん元気になっていく。手術は近づいてたけど、もうその頃は病院内の車いすチャンピオン。脳神経外科のセナ。勢いよく車いすを駆り、看護師さんに「俺の彼女。カワイイしよ！」なんて言ったりしてね。バカ丸出し。

よし、絶対歩けるようになってやる。俺の人生コイツに賭けた！もう僕は中途半端なんかじゃない。目標ができたんだ。一緒に歩きたい人がいる。それだけの目標、夢だったけど、僕が初めて自分で決めた夢。夢に小さいとか大きいなんてない。夢ってのは自分自身で見ることが、夢をみれることが素晴らしいんだ。

子供の頃から目標なしの夢なし甲斐性なし。そんな僕が嫌いだった。でもそんな僕を好きでいてくれる人がいる。今は自分が好きになれる。だって、あの子の好きなものを僕が嫌いになれるわけないじゃん。

そして僕は手術の日を迎えた。なんでやねん、親こねえの？

入院？（後書き）

まだ続きます。死ぬまで。

あれ？（前書き）

ブラックジャック！

あれ？

目が覚めた。まだ全身麻酔は効いたまま。なんか体に管を突っ込まれてるのだけは覚えてる。麻酔で頭がボーッとしてる。ふと気付くとそこには母親が。「目が覚めたか？とここでこの子誰？紹介してよ」と母親。母親の横にはあの子が立っていた。でもまだ麻酔が効きまくってる僕。何を言っただか全く覚えてないし、起きたことすらわかってない。あ、そや。手術したんだった。そんなことを考えるうちに、僕はもう一度麻酔の眠りについた。

再び目を覚ました。いったい今何時？手術はどうだったの？うーん。ふと気付くとそこにはまだ母親がいた。「あらおはよう。しかし麻酔ってすごいね。アンタ凄い喋ってたよ」え？覚えてないぞ。母親によると、麻酔が効いてる状態で一度目が覚めた時、僕は母にあの子の自慢をしまっくてたそうだった。

婚約解消のこと、あの子の存在。「死ぬほど好きやねん。オカン、いろいろごめんな」そう言っただけらしい。んであの子には「俺は歩けるぞ！大好きや！」と言っただけそうだった。コラコラ、麻酔は自己剤じゃねえぞ。むちゃくちゃしゃがるな、まったく。母親とあの子は麻酔ボケしてる僕に色々質問したらしい。酷いよね。ずるいよ。あの子はもう帰っていなかったが、母親に「あんたしっかりしなさいよ。今度はね」と言われた。オカン、ありがとう。色々悪かったね。

そして僕はその日の内に再び歩けるようになった。まだ痛みはあったけど、手術は完璧だったそうだった。マジ？先生ブラックジャックかよ！その日の内に歩けるなんて！「鍛えようによってバスケットもサッカーもできるよ」だってさ。おいおいそんなことどうでもいいっ

て。デートできるじゃん！僕生まれ変わるよ。全てリセット。ここからスタート。中途半端はもういらぬ。僕は中途半端な僕と愛用の車いすセナ号に別れを告げた。

そして地獄のリハビリ。相変わらずあの子はよく来てくれる。「なあなあ、もう一回麻酔しないの？」だつてさ。もつと聞きたいことがあるらしい。つてだから自白剤じゃないつての。麻酔なんか使わなくても何回でも言えるつて、「好き」ぐらい。聞かれなくても言い続けてやるつて。僕はモリモリ食べて、ガンガン鍛えた。病室に飾つてあるサッカーのユニフォーム。もう一度袖をとおせるんですよ。そしてあの子の写真。もう過去は振り切つた。僕には彼女がいる。

相変わらず友達とかは中々来てくれなかつた。だつて遠いからね。逃げるように入院したから。婚約者を裏切つたことで僕地元じゃ悪人だし。でもね、あの子が来てくれるだけで幸せだつた。来ない日なんてもうたまらなく寂しかつた。部屋に飾つてあるあの子の写真だけを見てニコニコしてた。おいおい、ハマりすぎ？看護師さんに「好きでたまらないんですね」なんて言われてさ。「じゃこれはいいね」つてエロ本捨てられた。それとこれとは話が違ふけどね。うん、彼女が好きなんです。それだけは恥ずかしげもなく堂々と言い張つた。ウザイよね、こつこつ奴。

運命の出会いってみんな口にするよね。それって何？僕にはわからない。女の人の気持ちは相変わらずわからない。運命ってなんだ？以前の婚約者と彼女が同じ誕生日だつたこととか？僕と彼女の誕生日が10日違いで生まれた病院が一緒だつた事とか？何でも運命つてまとめてしまつてたけど、そんなことで運命つて片付けられないよね。でもそのときは本気でこの出会いは運命の出会いだ、なんて

思ってた。

そんな時病院に思わぬ人がお見舞いに来てくれた。なんでやねん、
なんで知ってるの？

あれ？（後書き）

続けちゃいます

再会？（前書き）

ふー。

再会？

病室に数人の友人がやってきた。高校時代の友達。卒業から数年会ってない奴もいる。「あれ、なんで知ってるん？」ってな感じ。「何でもしってるぞ。お前が結婚から逃げた事もな」あら、もう地元じゃ噂なんやね。そしてその友人達に混ざり、僕の大好きだったあの子が。中学の時から思い続け、結局片思いで終わったあの子。

全然変わってない。ってかさらに磨きがかかってキレイになってる。「相変わらずムチャしてるね。結婚やめたんだって？」そんなこと言われてしまった。あー、穴があったら入りたい。そんなことを考えながら、僕は病室の台の上にある写真立てをこっそり伏せた。なんでだろ。この子に見られなくなかったんかな。恥ずかしかったんかな。結婚やめたのにもう彼女が・・ってのがバレルのがイヤだったのかな。

しばらく世間話した。みんな今どうしてるのか？そんなくだらない話。もちろん高校の仲間なので、僕の元婚約者の事も知ってる。でもその話題には触れなかった。気を遣ってるんだろうね。うーん。そしてしばらくした時、あの子が写真立てに気づき、僕の間を見て写真を見た。「えー！これ新しい彼女？やるねー！」だって。うわー、マジ勘弁。見ないで。って僕は何を言ってるんやろ。まただよ。

見られて何が悪い？ってかこの子には高校の時振られてるんだぜ？あ、振られた訳じゃないか。でも全然他人じゃん。相変わらず僕の大好きな女性だけど、もう関係ないじゃん。中途半端な自分にはお別れしたはず。いつまでこの子の気を引こうとしてるんだろ、僕。

「そうやねん。超カワイイやろ！新しい彼女やねん。」やっと言えた。また一つ過去を振り切った。「えー。早い。だってこの前別れたばかりなのに。」だってさ。そりゃこの子と僕の元婚約者は同級生、てか知り合いだしね。でも、新しい彼女の存在を明かすことによって、また一つ僕は成長出来た気がする。初恋の人、そして元彼女。それと決別できた。かな？

人間は過去を引きずったままじゃ成長出来ないって人は言う。でもそれは違うと思う。過去を認め、そしていつも心にそれを留めそして成長するんだと僕は思う。振り向いちゃいけない。前を向かなきゃいけない。そんな事はわかってる。人間って、過去は振り向かないように出来てるって知ってました？だって首が180度回る人っていないでしょ。振り返る時は胸も後ろ向く。振り返ろうとするともう後ろ向けに歩いてしまふんですね。

「別れたって聞いたから、狙おうと思ってたのにー。」だって。ってコラー！なんでやねん。

再会？（後書き）

まだまだ続きますね。

幸せ？（前書き）

うーん、女心。

幸せ？

数週間後、僕は退院した。体重は凄く減ったけどなんか満たされた気分。まだ走ったりはできないけど、まっすぐ歩くことは出来る。退院の時は彼女が付き添ってくれた。だってまだフラフラしか歩けないからね。車の運転も出来るようになった。もう少し経てば、元に戻れると思う。

それから。ずっと幸せだった。本当に心から好きだと言えた。全然恥ずかしくない。もう頭の中が彼女で一杯。仕事中也寝るときも。

彼女の事で頭が一杯。

彼女だつてそう。いままで相当男に苦労したらしく、こんな一途な僕に夢中になってくれた。「こんな人初めて」だそう。嬉しいね。本当は女性に優しくするしかできないだけなのに。でもそれが良かったのかもしれないね。楽しい会話に楽しいデート。色んな所に行ったし、色んなモノを2人で見てきた。彼女の職場まで毎日迎えに行き、ただ送って行くだけの数十分。その車内が僕を満たし、彼女を満たした。

彼女といると、様々な「キセキ」っぽい事も起きる。絶望的な状況から救われた事もあった。病気も彼女をみると治る気がした。毎日が本当に短い。楽しすぎてたまらない。食べるもの、見るもの聴くものの着るもの。全てが合う気がした。2人ともうこの人しかいない、そう思ってた。結婚するならこの人！お互い決めてた。

誰だつてそうだよ。付き合いたての頃は本当に楽しい。だつて付き合いたてから「ここが合わない」なんて思ってたならダメなんですよ。そして好きだったなら自然とお互い歩み寄り、嫌いなモノが好き

なモノへ、自然と2人の視線が合っていくもの。合わなければそれは本当に全て好きじゃないのかも知れないし、相手の事よりも自分の事だけを考えてるのかも知れない。

でもね、やっぱり思った事。僕は特殊な人間なんだって。コンプレックスから抜け出せない、女性に対して優しくすることしか出来ない。そんな人間なんだって。いつかそういう日が来るとは思ってたけど、やっぱり来たね。

なんでやねん、なぜダメになるの？僕たち。

幸せ？（後書き）

さてさて。続きます。

別れの予感？（前書き）

うーんうーん。

別れの予感？

彼女には重荷だったのかも。一途すぎて鬱陶しかったのかも。僕はあの時決意して、中途半端な自分にお別れを告げそして彼女の為に尽くそうと決めていた。だってさ、こんな僕が婚約解消という最悪の状態で女性を泣かし、1人の女性の夢を壊してしまった事があるんだよ。もう誰も泣かせたくない、こんなくだらない男のために女性を苦しめたくない。そう決意したんだよ。

彼女は口もきかなくなっていた。彼女は彼女なりに悩んでいたんだろう。僕はそんなことダメだとわかっているんだが、必死になってしまった。たくさんメールし会いに行きそして説得した。でもダメだった。半ば鬱状態。彼女も苦しんだのだろう。元々飽きっぽくてワンマンな彼女。ついに来たかな、僕がフラれる日が。

でも誠意が通じたのか、彼女は数日で元通りになる事が多かった。そしてまたいつも通り中のいい2人に戻る。しかしまた彼女は鬱状態になる。でも彼女は決して鬱病なんかじゃない。だって彼女が黙り込むのは僕の前だけなんだから。一途に思い込む僕が彼女には重たかったのかもしれない。でも僕はこういう人間なんだ。自分から女性に別れることなんて言えない男。優しくすることしか出来ない男。中途半端とサヨナラし、自分の決意を最後まで貫こうと決めた男。

人ってね、無理な状況や先のない状況で恋すると暴走するんだって。そしてね、その恋は冷めるのも早いんだって。

無理とわかってる、先のない恋愛は凄く楽しく悲しくそして燃え上がる。しかし、それが手に入ってしまうと冷めるのも早い。人は欲しい物があると頑張れるもの。でも手に入るといつしかその事は忘れ、また違うものが欲しくなる。そんな生き物。そんな悲しい生き物。

あーあ、この子も同じなんだ。普通の子なんだ。でも僕は違う。全てを捨てて手に入れた幸せ。もう離したくない。やるだけの事をやってもまだ足りない。結局自分を責めた。彼女から離れていくのは自分のせいだと自分を責めた。相変わらずダメな男。昔の自分に戻っていくのがわかる。

僕は頑張った。何度彼女の心が離れても諦めなかった。諦める？何それ。僕にはそんな言葉はない。諦めかけたとき、いつも思い出す。中学の時かけて貰った声、初恋の人の優しい言葉。「もういいよ！」と言えば簡単に終われる。でも諦めない。もう諦めない。

なんでやねん、この気持ち届けよ。

別れの予感？（後書き）

あと少しかな。

サヨナラ？（前書き）

そろそろ終わるかな。

サヨナラ？

そんな事を繰り返し、僕は何度も捨てられた。1週間、1ヶ月。僕は捨てられるたびに努力し、元通りになった。彼女も自分のメンタルの弱さをいつも謝るが、そんなことどうでもいい。もう鬱状態には僕がさせない。彼女は言う。いつも悪いのは自分だと。いやちがうよ、僕がしっかりしてないから悪いんだ。

僕はやっぱりどこかいつも中途半端。彼女の事だけを考えて努力してたけど、それ以外の事が中途半端だったのかもしれない。仕事や金銭感覚、生活態度。将来の事が見え隠れする彼女には、それが不安だったのかも知れない。僕は本当に努力していたのか？彼女に対する自分だけを磨き、「本当の自分」を磨き忘れてはいないか？今だから言えるけど、その時は何も気付かなかったし、わからなかった。

いつしか捨てられる回数と期間が増えた。「捨てられる」って表現はオカシイかもしれないけど、そういうことなんだ。将来に不安を感じ、そしてダメと言われている。そういうことなんだ。彼女は裕福な家の出身。末っ子のお嬢さん。僕は貧乏生まれの長男坊。親は努力でのし上がった一代目。今でこそ裕福ではあるが、それは大変な苦勞をしてきたのを僕は見ている。

僕の夢。この頃には「彼女との楽しい家庭が欲しい」に変わってた。相変わらず小さい夢。仕事とかそんなことどうでも良かった。もちろんお金持ちになりたいけど、彼女がいなけりや意味がない。彼女の為に働き、彼女の為に側にいる。あまり格好よくはないけれど、これが僕なんだ。欲しいものは彼女が欲しがるもの。全ては彼女。うーん、うまくコントロールされてたのかな？

彼女と会いそして一緒に過ごす。毎日顔を見に行った。毎日メールした。そして捨てられてはまた付き合う。そんな繰り返し。僕から離れた事は一度もない。常に僕は彼女の事を思い続けていた。だってそうじゃん、それしかできないもん。

そして付き合いだして8年。僕は33歳になって、完全にサヨナラを告げられた。なんでやねん。

サヨナラ？（後書き）

続きます

新しき道？（前書き）

フラれちゃいました。

新しき道？

なんか抜け殻。だってもう彼女しかなかったから。しつこく電話やメールもしたが、いつしか「そんなことしても余計嫌われるだけ」って気付いた。無気力、鬱状態。仕事も手につかず、酒に逃げる事もしばしば。荒れた生活、夢も何もない。ただフラれただけなのに。友達には「女なんて星の数だけいる」と言われていたが、僕には賭けているものが違った。1人の女性の人生や夢を壊し、そして手に入れた人、幸せ。なんでそれを守る事が出来なかったのだろう。たかがフラれただけ、と言えばそれまでなんだ。でもね、コンプレックスや女性に対する気持ちを全て変えてくれた人。僕に自信というものを植え付けてくれた人。

そして彼女と別れることによって、僕はまた昔の自分に戻っていった。女性恐怖症？みたいな感じ。たくさんの女性と知り合ったが、全然ダメ。元カノへの未練とかそんなんじゃない、もおう中途半端な弱虫に戻ってしまった。「時間が経てば大丈夫」そう言われてたが、何も変わらなかった。

そんな時、ある人と出会った。こんな僕を慕ってくれる、素敵な女性。やっと彼女の事を振り切れる、そんな思いが頭をよぎった。その子は尽くしてくれた。ダメダメな僕を支えてくれたし、僕もそれに精一杯答えようとしたんだ。そして知らず知らずのうちに半年が経った。

もう僕の頭の中には過去のことはなかった。そう思ってた。

フラれた人を前にして、あなたは何と声をかけますか？「またいい人見つかるよ」「君なら大丈夫」普通はこう言いますよね。確かにそのとおりです。でもね、見つけたいのはいい人じゃない。思い出を越えられる人、新しい自分を作ってくれる人。

過去を引きずるのはダメ、と人は言うがそれはそれでいいと思う。引きずったらいつかは磨り減る。引きずり回して、無くなるまで磨り減らせばいい。そうすれば、自分が鍛えられてまた新しい何かを引っ張れるのだから。

僕は少しだけ幸せになりそうな気がしてた。

でもそんなにうまくはいかなにね。なんでやねん、どうなる僕。 3
3 歳。

新しき道？（後書き）

もうすぐ終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944e/>

なんでやねん

2010年10月10日05時27分発行